

聞き取り調査

私の抑留生活

茨城県 梅沢 正之進

私は大正十二（一九二三）年生まれで、今、八十五歳です。

地元の中を出まして、満州の鞍山という製鉄所に勤めておりました。昭和十九（一九四四）年十月、松花江と黒竜江が交わり、後ろの山に登ればソ連が見えるという北満の富錦で、少年兵生活を送っております。幸いにして、甲種幹部候補生になり、牡丹江近くの石塔予備士官学校へ七月一日に入隊しました。そして、四十日たった八月九日にソ連軍が突然侵入してきた。

その当時の関東軍は、私も後で聞いたことですが、全部南方に行っちゃって、兵隊らしい兵隊はいなかったわけです。そして、二十年の五月ごろ、満州でもって、兵隊に行けない、年齢、三十、四十の男の人を兵隊にして、その陣地に何にもなくて、鉄砲を持っている人は帯剣がない、帯剣がある人は鉄砲がない、そのようなところに兵隊さんが留守番というか、ソ連側に木を染めて、大砲があるような格好をしておったというような状況です。

それですから、ソ連が攻めて来たら、ダーッと、三十トンもあるK24という戦車が、私の面前には百五十台も来たわけです。それで、牡丹江が危ないというので、石塔というのは牡丹江の近くです

から、住民を送らせるために行けというので、三千六百人のうち千八百人が前線に、さらに九百人が磨刀石というところに行き、道路のわきにタコつぼを掘り、梱包爆弾を持って、何にもできませんから、手榴弾を点火して戦車に飛び込み、約四十台ぐらい擱座し、二日間侵入を止めたために牡丹江の人は逃げたというような話を聞いています。

私らがなぜ助かったかといったならば、銃器管理ですから、道路にいる人を掩護するために、後ろにいて、それを見守っていたから助かったわけです。ほとんどの人がやられましたから、後ろに下がって、牡丹江に行きました。夜の九時になりましたら、今度はあんたたちの番だと言って、突然、後ろへ下がれという命令が来ました。そのときは、何で命令がきたか分からなかったんですが、十五日正午に終戦なので、やっと助かり、私は現在、この世にいるわけです。

兵隊は、国際法上、すぐ帰れると。民間人は勝手に来たんだから、いつ帰れるかわからんよとい

う話がありましたから、私らも、じゃあ、もう内地へ帰るんだなというので、武装解除しまして、牡丹江近くのハイミンにおりました。

夏服と雑糞一つで、二カ月間ぐらい北満におったんですが、食べ物もないものですから、満州の畑とかそういう所へ行って、やっとこ暮らしておりました。十月になって、汽車に乗って、いよいよ帰れるというので、喜んで汽車に乗ったわけです。

その前に、もう一つ、おかしいと思ったのは、私ら、候補生五百人ばかり集まったならば、百人ずつ切られて、一般の部隊に入れられてしまったんです。なぜかと思つたらば、私たちは戦争をして、私らが軍曹でもって団結も強いので、内地へ帰るんなら何でもないんですけれども、向こうで作業させるために、こういう人が入ったら大変だろうと思つて分けられたんだそうです、後の話ですが。ほかの幹部候補生は、みんなはそのまま渡っております。

皆さんも岸壁の母というのをご存知だと思いますが、岸壁の母の息子の端野は、私たちと同じ、やっぱり磨刀石で戦った人間でございます。彼は戦死はしておりません。足をけがして、牡丹江の病院に三月までいたというのは確実に知っておるが、その後のことは分かりません。

その話はそのくらいにしまして、私らが行ったところは汽車に乗りまして、もうてつきりウラジオオに行くんだとばかり思っておりましたらば、ソ連のほうに行く汽車、貨車の中は全部、外が見えないようにしておりまして、二段でぎつしり詰まっております、もう何にもできない、時々止まって、食料をくれたり、便所をするとか、そういうことだったんです。それで、途中でもって朝になりまして、兵隊も、あれ、おかしいよ。太陽が西から出ているというわけなんですよね。そうしたら、ウラジオオへ向かうんではなくて、ハバロフスクのほうに向かっていたわけなんですよ。それでもって、初めて、これはおかしいなと思ったら、ハバ

ロフスクへ着きましたら、日本の船がナホトカに迎えに来ない、ウラジオオに迎えに行くから、あんたたちは、ここでもってちょっと待っていて下さいというわけなんです。その待っていて下さいが私を四年間待たしたわけでございます。

イズベストコーワヤは、シベリア鉄道と満蒙鉄道の中間、そこにあつた鉄道のレールを独ソ戦で持っていたものですから、私らはそれを補充するための要員として、シベリアに連行し、収容所へ入れたわけです。その鉄道は、本当に山の中であって、激しくて、敷設したときには、まくら木一本ぐらいの数に、一人の囚人が死んだという所でございます。

十一月になると、もう雪野原です。先陣が、雪野原を夏服に、軍靴でもって、行軍ですから、途中、囚人の収容所もうんとありましたから、そういうところに泊まり泊まり行ったわけでございます。もちろん食料なんかも、大体ソ連は、独ソ戦で食料がなかったから、ものすごくひどかったら

しいんですよ。だから、我々にくれるなんていうのは、ほんの少しでもって、食料はなし、寒いし、もうひどかったです。私も下痢して、後をついていくのがやつとです。もし遅れたらドカーンと殺されたということもあるそうでございますから、本当に命からがらでもって、十日かかりまして、二〇二収容所、エフルカンというところへ着きました。

最初のうちは大した仕事はなかったけれど、私どもの収容所、五百人いたんですけれども、私が助かったのは、通訳と軍医さんが大変よい人というか、ソ連とけんかしながらやったような人でございまして、通訳の人は、帰ってきて長崎の市会議員になり、軍医の安芸さんは虎ノ門病院の内科医長までやった立派な人でございました。

我々は、熱が三八度以上、けがとか、よほど仕事ができない以外は仕事に出ろというわけで労働したわけです。経験の有無に関係なく、おまえはこれ、何でもこれと言われますから、土木作業な

んでいうのは、本当にノルマなんて言ったって、とても無理ですね。それで、道具がいいのならないけど、ターチカといって、木でつくった一輪車でもって、五十メートルも八十メートルも土を運搬するような仕事をさせたものですから、もう本当にみんな参っちゃって、それでも、私のところは軍医さんが頑張ってくれたものですから、通訳が頑張ってソ連と交渉したものですから、ほかでは、寒さと飢えのために一年に五十人死んだ、百人死んだという話を聞いたけれども、私のところは五、六人で済んで、そのために私は助かってきたようなものです。

ソ連は食料がありませんから、我々にくれた食料は、満州からかっぱらってきまして、アワ、コウリヤン、トウモロコシ、大豆などをくれたわけです。そして、アワ、コウリヤンあたりは、朝晩おかゆにしてくれるんですけれども、大豆とか豆類は飯盒に十粒ぐらい、パラパラパラッとくられるような食料なんです。それでもって重労働を

やれと言うんですから、身体が悪くなるのは当たりまえです。それに寒さも、零下三〇度から四〇度ぐらいになります。たまに五〇度ぐらいになりますと、さすがに、本当は三〇度以下は仕事に出さないというような規定だなんて言いますけれども、四〇度ぐらいまでは出されました。五〇度になると、さすがに水中の水分が凍りまして、露がかかると、さすがに太陽が出るまで幾らか待機などされて、待機されても、まだやっぱり同じでございました。

私もついにオカになりました、今度は仕事せずにおれと言うんですけれども、なかなか楽なことをさせてくれませんで、収容所内の掃除、いろいろな雑用、ソ連人の将校の官舎の手伝いとか何とか。一番ひどかったのは、便所掃除でございます。便所が凍っていますから、氷になっており、それを十字鋏で砕いて、モッコでもって担ぎ出すわけでございます。本当にもう話にならないです。そんなことをやっているんですから、オカになっ

ても、さっぱり休めず、まあ、本当にひどい目に遭いました。そして、こんなことを言うとおれませんが、十字鋏で砕くものですから、しぶきが飛びます。落としたつもりでも、部屋の中に帰ったら、それがプーンとおつてきて、本当に苦労しました。

私らが、もう一つ、ひどかったというのは、所長のナチャイクという共産党員が、独ソ戦でもって捕虜になり、こちらに戻ってきたものですから、自分の成績を上げたいために、我々にノルマを上げる、上げろと言った。夏などは四時ごろから十時ごろまで明るいので、なかなか帰してくれない。帰ってきたならば、日本の将校に、おまえたちの兵隊は仕事しないからだめだ、だめだと言われる。そうすると、今度は、日本の将校もしようがないから、おまえたちには悪いけど頑張ってくれなんてハッパをかけられて、帰国してきてから、いろいろなとき、いやあ、みんな申しわけないと言っていました、本当にそういう状況でこ

ございました。

それから、話がまとまりませんが、昔は、色気八分に食い気二分なんて言いますけれども、これは全然違います。食べれなかつたら、食い気一〇〇%です。こんな話をしたら、女の方にちょっと失礼かもしれないけど、大体男は、向こうでは身体検査がある。それでもって、一級、二級、三級、オカとって、一級は重労働、二級は普通の仕事、三級は軽作業、オカは休みとなる。来る医者というのが、看護婦さんみたいで、二十二、三くらいの若い人が来るけど、けつの肉をつねってそれでもって簡単にちゃんと分かるんですね。そうすると、普通でしたら、真裸ですから、普通男でしたらそんなの、若い、二十二、三の青年ですから、男としたら、男性のシンボルがうずくんだけど、そんなことなく、もう下を向いたままで。我々は、本当に食べることが一番。

作業に行つて、昼間の休憩が一時ありますけど、そこらにある雑草、食べれるものは何でも食

つて、飯盒でもつてお湯を沸かして、それで煮て食っていました。たまには、これは向こうでも怒られましたけれども、毒があるようなものでも何でも食べちゃつたものですから、下痢したりして怒られたこともありました。

収容所で困つたのは、シラミです。収容所が狭く着がえも何もありませんので、仕事から帰ってきたら、寝たきりでゴロゴロしておりますから、シラミもわきます、シラミがずらーっと、シラミの行列でした。

白癬になるので、向こうでも困りまして、二年ぐらいたちましたら入浴場ができ、そこに入つて入浴し、シャツなどを取り替えていた。シラミは、寒さに強く凍っていたところに出しても死なない。熱風とか熱だつたら、弱って死ぬものですから、熱風に合わせて着物を取り替えてくれました。そして、念のために、頭はもろん、陰毛まできれいにしろと言われて、きれいにされて、そんな状況でございました。ですから、どうにかシラミ

などもしまいのころはなくなってきました。

最初のころ、ソ連人は、我々が逃げるのを非常に厳しく監視し、柵の中の近くへ行くと、便所など遠いから柵のほうに立ちションしてやろうと思つたらば、望楼からバカーンと銃で撃ってきた。

うちのほうじゃ殺されなかつたけど、殺されたなんていうのもあつたらしいです。

仕事もいろいろやらされましたけれども、伐採なんていうのも途中でやらされましたが、何しろ、シベリアは一メートル下ぐらひは夏でも凍っていますから、じめじめして湿地帯みたいになっています。ですから、松の木とかの大きい大木を持ち出せないために、冬やるわけです。冬、二、三センチ積もつているところでもつて、防寒服を着て、手袋もやつて、大きな木を切つて倒すがノルマも大変ですけれども、木がどっちへ倒れるかわからない、うまく倒れて、こっちへ来るんじゃないか思っていると、とんでもないほうに飛んできました、最初のうちは亡くなった方もいました。私も、

木がバーンと十センチぐらいのところ倒れてきまして、やっとこ助かったような状態でございました。それでも、みんな、一緒に住んだらやらざるを得なかつたものですから、そういう作業をいろいろしておりました。

二〇二収容所にいるとき、鉄道用レールが出来ましたので、貨車で持つてくるが、夜に卸すという作業に駆り出される。この作業は、昼間働いてもやる、夜はノルマでも何でもないですから、残業手当もないけど、もうそれが来たら、それをやらなきゃならんです。そして、また、昼間、当り前に仕事をさせられる。本當につらかつた。

貨車に碎石を山ほど積んでいる。車も貨車もろくなものじゃないから、外し方によつてはバーツと飛んで来て、けがして死んだ人もある。そんな作業を随分させられました。

何が危ないと思つても、パーツと逃げようと思つても、元気だったら逃げられるけど、空腹で、ふらふらつとしているから、けがする人も多かつ

たです。

戦争をしていなかった方は外套など冬物の服を着て行ったが、私らは、綿の夏服を着ているものですから、焚き火などしていると、火の粉で焼けて、綿の間にすぐ穴があいちゃって、洋服を燃やしたり何かしたんですけど、なかなか着替えをくれなくて、本当に困ったこともありました。

二、三年たちましたら、民衆運動といって、ソ連では、我々のことを洗脳させて、共産主義のことを勉強しろという話があり、最初のころ、行った人もありましたが、私は最初のころは行かないようにしておりますけれども、日本新聞という新聞が来まして、日本の状況を書いてある。日本はもうひどいと、とにかく全部焼野原でもって、帰っても、あんたたちが生きていくところはないんだなんて言っているうちに、たまたま見ていましたら、土浦は、昔、ご存知のとおり、茨城の三区なんですよね。共産党が多く、茨城県の三区でもって、池田さんという人が当選しておったもの

ですから、ああ、なるほど、土浦あたりも共産党員の人が代議士になるようだったら、これは勉強しなければ大変だな、なんて思っておりますら、私らの幹部候補生仲間は、おまえたち、とにかくこれをやっていけば、仕事しなくても、我々の話を聞いていけばいいからと言われて、四十五日間も聞きに行っていた。

私は、聞きに行つてよかったのは、やっぱりソ連に邪魔したとかなんとか言われて、せっかくナホトカまで行つて、ダモイ要員になつても、後に回されて、あと五年とか十年とかになった人があるんです。たまたまそのときの先生をやっていた人が私の仲間だったものですから、おまえ、俺のことだけはどうしても帰してくれと言っていたから、帰つて来られました。私は大変よかつたと思います。

今の日本人は、戦争に対する考え方が非常に甘いと思う。広島とか長崎、東京、焼けた所の人は、感じるかも知れないけど、まだまだ日本の人は、

ああ、戦争がなんて考えて、今でも戦争をやってもいいじゃないかと思っている人がいる。しかし、戦争は絶対だめ。戦争というのは、相手を殺さなかつたら自分が殺されるから。

満州で私は見ましたけど、例えば、あそこに人がいる。あの人は味方が敵かわからない。なら、殺しちゃまえと言うわけですからね。殺しちゃうわけですから。あれ、邪魔だからやっちゃまえ。そういうことです。

戦争をやったら本当に惨めです。人が滅びるだけでございます。戦争は絶対にやってはいけません。そのようにしていただきたいのであります。

モンゴル、ウランバートル抑留記

栃木県 上野省 吾

望郷の日々

昭和十八（一九四三）年十二月一日いわゆる、学徒出陣の名のもとに私は宇都宮市の第五十一師団通信隊補充隊（東部第四十三部隊）に現役兵として入隊した。その後、幹部候補生となり神奈川県相模原市の陸軍通信学校幹部候補生隊に入校。八カ月の厳しい幹部教育を終え、昭和十九年十二月二十三日、同校卒業と同時に見習士官となり、支那派遣遣軍に転属、電信第二十九連隊へ、北支派遣甲第一二五〇部隊付を命ぜられ、昭和二十年一月二十日、北京北郊城外にある同隊に着任した。それから約六カ月北京周辺の治安維持と通信網の確保、初年兵教育の任に当たっていた。八月七日ソ連参戦、ソ蒙軍の満州侵攻となり、国境周辺地帯はにわかには緊迫の度を加えるに至った。